



宝 物

教育長 津野庄一郎

明石家さんまさんには、「いまる」という一人娘がいます。さんまさんは、幼いころにお母さんを、次いで弟さんを火事で亡くしています。そして、父を亡くし、家族のほとんどを失います。また、さんまさん自身も日航機墜落事故（1985）の飛行機に乗る予定でしたが、仕事が早く終わったので 1 便早い飛行機に搭乗し、難を免れたといひます。こうした経験をふまへ、いつしか「生きているだけで丸儲け^{まるもう}」という言葉大切に、一人娘の名前にその願いを込めたそうです。

親というのは、自分の子どもに願いを込めて名前を付けます。そのまた子どもも成長して親になり、「願い」を込めて名前を付ける。それを繰り返し、「願い」のバトンが引き継がれていきます。

先日、新聞の投書にある中学生が「一生で、何千回も何万回も書く名前。小学校に入ると私は真っ先に自分の名前を書けるように練習しました。自分の名前は両親からの最初の贈り物であり、大切な宝物です。私は自分の名前が大好きです」とありました。そして、「宝物とは、心の最も深いところにあつて、私が私であり続けるためのもの。それが自分の名前です」とも述べています。

入学式や卒業式では、学級担任から素敵な名前が呼名されます。目に入れてもいたくない我が子の幸せを願って付けた名前。この夏に機会をとらえ、ご自分の子どもに、生まれた時のエピソードとともに名前に込めたその願いを聞かせてあげてください。また、子どもたちは、ご両親に自分の名前に込められた願いを尋ねてみてください。めぐり合えた奇跡・命に感謝です。

<写真：鉾江沢の棚田から杵差岳を望む（6 月 30 日）>